

ジャン＝ルイ・バロー 「Ch. グランヴァル」¹⁾

Jean-Louis Barrault, « Ch. Granval » (1949)

デュランのあと、アルトーのあとで、私にもっとも強い印象を残したのはグランヴァルである。ただし、次の表にみるような控えめさによってである。この控えめさなくしてグランヴァルは生きられようがなかった。

デュラン	アルトー	グランヴァル
地球	太陽	月
誕生	火の試練	感情
からだ	精神	そして魂
純粹	真実	徳
開拓者	預言者	芸術家

グランヴァルは芸術家の第三世代に属していた。

ルーアンの国立劇場で生まれた。芸術家を父に持つ彼の父親は、劇場支配人であった。グランヴァルが、「劇場の子供」と呼ばれたのはこのためである。

グランヴァルは間違いなく、前衛の人であった。学校に行っていた頃、テアトル・フランセで私が感銘を受けた唯一の舞台作品（前評判では良いとも悪いとも聞かされぬまま見に行った。A. ランベールとマドレーヌ・ロックの芝居がおかしくて涙が出るほど笑ったせいで、彼らが『エルナニ』に出てきても笑ってしまいそうになったが）は、『若い娘たちは何を夢見る』（*A quoi rêvent les Jeunes filles*）だった。装置を担当したのはマリイ・ローランサン。そしてドビュッシーの音楽が借用されていた。これを上演したのがグランヴァルだった。1924～1925年シーズンのことである。

しかし、パリでちょっとした社会問題となった舞台といえば、1921年にグランヴァルが再演した『スカパンの悪巧み』だった。

1946年に私たちがコメディ・フランセーズを離れたときもなお、グランヴァルの演出のままに、この二作品『若い娘たちは何を夢見る』『スカパンの悪巧み』が上演されていた。この間25年、他にずいぶんたくさんの演出作品があったはずなのにである。

グランヴァルは、真の前衛芸術家にして、激さぬア

ナーキストでもあった。彼は激するにはあまりに芸術家でありすぎた。好戦的な性向を強められるだけの欠点がいくつか不足していたのである。

芸術家の第三世代、つまり言うてみれば、温室育ちの切り花である。すぐに綺麗に咲くが、すぐ傷んでしおれる花。グランヴァルは心ならずも、彼の優位をつくっていたもの、すなわちほぼ出来上がった既存の一つの文化を手離さなかった。

彼は、コンセルヴァトワールでロワールに師事、たしか『フォルチュニオ』（*Fortunio*）で一等賞を取ったあと、1902年にコメディ・フランセーズに入団したのではなかったかと思う。

グランヴァルはそうした話を私にはまったくしなかった気がする。だから私がそれを知っているのは、彼から聞かされたからではない。こうして書きながら、私が細部で少々情報に自信が持てないのはそうした理由による。グランヴァルのことを人に話すことを彼自身が私に許可してくれたこともない。もっとも、今こうしてノートをまとめる段になって、彼のことを話せば彼が喜ぶだろうとよく知っているにせよである。今私がやっているような書いてまとめる仕事は、グランヴァルなら引き受けなかったろう。彼はきっと、そんなことは術学的で傲慢な行いで、やればやるほどくたびれてうんざりするだけだと言うに違いない。

グランヴァルは18年にわたり、コメディ・フランセーズの準座員だった。35年もの間テアトル・フランセで過ごし、55本以上の作品を上演、正式に名前を出しさえしないこともあった。

彼はテアトル・フランセすなわちコメディ・フランセーズを称して「中央薬局」と呼んでいた。しかしあまりにも愛しすぎていたからそこを去れなかった。

私は古典の領域の作品と付き合ってきた。テアトル・フランセの昔からの上演目が観客に与えることのできる深い見識に寄り添ってきた。そして、このことが、前衛演劇運動にどれほどの打撃を与えるか私には分かっている。むき出しの前衛は、古い知見などものともせずにい

1) [訳註] 底本には、以下を用いている。Jean-Louis Barrault, *Réflexions sur le théâtre*, Paris: J. Vautrain, 1949, pp. 89-93. 本稿はその第8章に相当する部分の翻訳である。

ともたやすく影響力を持つ。しかし難しいのは、知とどのように和合していくかである。グランヴァルが新たに率先してやろうとしたことはしかしどれもみな、テアトル・フランセで彼を育てあげた古道具の重しによって失速してしまった。なぜならば、その知があまりにも真であるというそのことが、彼自身から奪い去ってしまったのだ、間違える権利というもの。

無知な者なら野心を持つこともできよう。個性が強いなら、それを新たな個性とすることもできよう。しかし、深い文化的教養のある個性にとっては、あえて新しいことをやるのは簡単でない。なぜなら、新しいことには失敗がつきものだからだ。そして教養があると失敗に敏感になる。グランヴァルのような、あまりにも芸術家過ぎる芸術家にとっては、失敗することすなわちセンスに欠けることとみなされがちなのだ。センスに欠けることだけはやりたくないと恐れるあまりに、新しいことに挑戦しようとする気持ちが挫かれてしまったのではないかと思う。

だがしかし、それでいて彼は、生涯にわたり、考えるということにおいて、絶対的な自由を大切に持ち続けた。

ムネ・シュリーは彼を家族として迎えた。二人はよく一緒に外出をした。純粹さということを二人とも心から理解しあっていた。ある日のこと、無垢であることにおいて彼の右に出る者はいないムネが、若きグランヴァルに尋ねた。この世で一番いい役者といえば誰だと思う？

グランヴァルはムネを見つめて答えた。「師匠、ニジンスキーですよ」

グランヴァルには人に嘯みつくようなところがあった。彼に嘯みつかれたらもう避けようがない。ただガブリとやられるしかない。彼からの一撃にはもう慣れるよりほかどうしようもない。

喜劇をやらせたら実にうまかった。けれども彼は喜劇にはすぐに飽きてしまった。いやもしかすると、彼はあまりにも喜劇が好きすぎたがために、ちょっとでも気に入らないところを見つけてしまうとそれだけで全部が面白くなってしまったのかもしれない。

彼は、演じるのと同様に絵を描くのもうまかった。舞台作品をつくるときは、装置も衣装も自分で担当していた。音楽をどうするかについても、誰かに教えてもらう必要などまるでなかった。

いわゆる碩学だった。それでいて、知識人然とした感じがなかった。

何をしていても、到達できたと思えていないようだった。彼の人となりが分かってくると、その恒常的な不満は、彼が激しく苦悶しひたすら粘り強く努力していたた

めだと分かるのだった。

彼はとりわけ俳優というものを本当に深く理解していた。『飢え』とラフォルグの『ハムレット』とで構成された私の三作品目を上演したとき、グランヴァルには『ハムレット』を任せた。ラフォルグによる『ハムレット』翻案はそもそも彼によるものだった。この作品で彼は、ただ一つの単語を追加することもせずに、ただシンプルにしかし巧みに、はさみで切る仕事をそれは丁寧にを行ったのだった。

私はほどなくして気づいた。グランヴァルこそは、私がそれまでに知り合ったあらゆる演劇人のなかで最も俳優の何たるかを知っている。さらにもっと言うなら、人間が演劇から得られるあらゆるものを、彼は誰よりもよく知っている。

ラフォルグの『ハムレット』で彼が私にやらせたことが、私にはこれ以上ないほどに得難い経験となった。それまでに私が挑戦してきたすべてのものに彼は芸術をもたらしてくれたのだ。芸術とはすなわち、選択のことだ。作法のことであり、センスのことであり、必要ならばセンスの欠如そのもののことであり、要するにそう、選択することなのだ！

そこに野バラの木がある。あなたは前掛けをし剪定ばさみを握りしめ、ミステリアスなバラの挿し木とナイフと数センチのひもを持っている。無造作なくわえタバコで何か別のことを考えているような風をしながら、あなたはそこでバラを育てた。そこにハードレイ、エディット・ヘレン、コルデス、マダム・エリオといったバラが花を咲かせることとなった。

グランヴァルはそういう、園芸家だった。

彼は私のねじをゆるめて、朗誦の道へ導いてくれた。本当の意味での技というものを示してくれた。のちにコメディ・フランセーズに入った私はつくづく思い知らされた。グランヴァルがどれほどに、この歴史ある劇団^{メゾン}をまさしく代表する存在だったのかということ。この劇団は、よく知られているとおり、ブルゴーニュ座の伝統とモリエール劇団の新進気鋭の精神とが合体してできた。グランヴァルこそは、偉大な伝統と前衛的精神とが深いところで合致した稀有な例であったといえるだろう。伝統と前衛とは、一見して相反するようにもみえるが、グランヴァルは両者をひとつにすることに成功した。私も同じように両者をひとつにしたいという野望に向かって進みたいと思っている。グランヴァルはこの意味において、彼がそう意図したわけではないにせよ、私に多大なる影響を及ぼした。私の師匠だ。

けれどもグランヴァルは喧嘩をしない人だった。身体があまり強くなかったせいで、ラフォルグの言葉を借り

れば「ハムレット的な」師匠だった。控えめな人だった。
彼から、素質とはなにかということを身体感覚をもつて教えてもらった。

グランヴァルは、本当に混じり物のない芸術家だった。
(訳：間瀬幸江)